



江戸時代から現代へ 久留米藩の特産品「久留米絣」 城下に響く機織の音

藍

と白のコントラストが美しく、全国的にもよく知られた、筑後地域を代表する特産品「久留米絣」。その知名度の高さに比して、久留米絣がどのような織物であるのか、また、歴史的にどういった変遷を辿って現在に至ったのかは、意外と知られていません。江戸後期に生まれた久留米絣の発展の歴史を追ってみましょう。



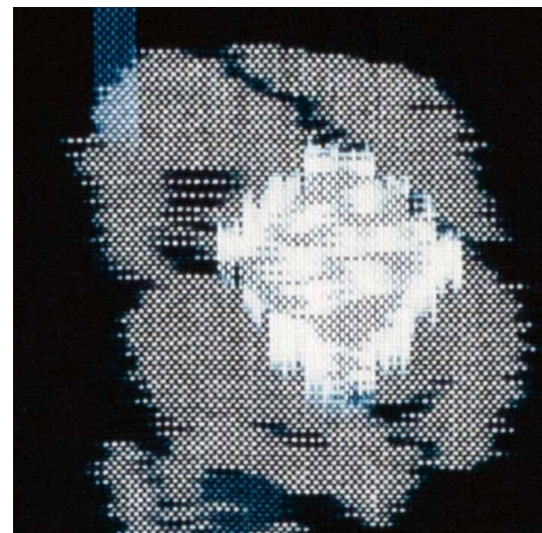
久留米絣布団地「松皮菱」

久留米藩の国産品にもなった久留米絣。重要無形文化財でもあるその技は、どのように受け継がれてきたのか。その歴史に迫ります！

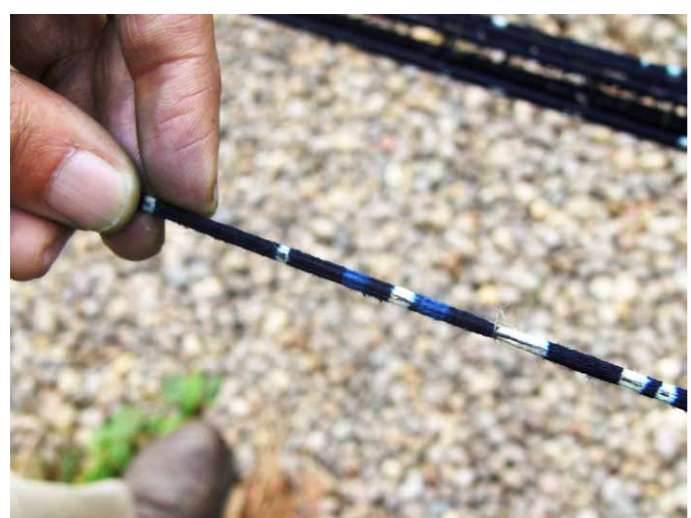


1 久留米絣って どんな織物

絣さきぞという織物を一言で説明すると、「先染めの織物」です。完成した時に柄がらとなる部分を、染まらないように、糸の段階で紐ひもで括くわって防染ぼうせんし、染料で染めて、「絣糸かすりいと」を作り、それを織機の上で柄を合わせながら織り上げます。つまり、布地になった際に見える柄を、一度糸の単位まで分解し、染めて色をつけて、織る時に柄を再



絣（柄部分の拡大）
※糸自体が染め分けられている



染め終わり、括りを解いた糸束

2 始まりは、ひとりの少女の好奇心

久留米絣は、江戸時代の天明8年（1788）に筑後国御井郡久留米通外町いのうえだんに生まれた、井上伝いのうえだんという女性によって創始されたと伝わります。当時の久留米藩領内では、綿花や、藍染あいぞめの原料となる藍あい（タデアイ）の栽培が盛んで、農家や商家の副業として、機織はたおりが一般的に行われていました。

伝は、6〜7歳で機織り修行を始め、11〜12歳頃には高い技術を習得していたといわれています。そしてこの頃、着古して所どころ白く染料がぬけ落ちた着物を見て興味を覚え、着物を解いてみて、糸1本1本に染まったところと白く抜けたところがあることに気づきました。そこで、柄となる部分を紐で括くわって染まらないように工夫し、藍で染めた糸を用いて、



井上伝肖像画

これまでに無かった意匠の織物を作り上げました。これが久留米絣の発祥と伝わります。

この久留米絣誕生の伝承については、記録としては伝の没後のものしかなく、定かではありませんが、伝が創意工夫のもと技術の開発向上に取り組み、更にその技術を惜しむことなく広く伝えたことが、久留米絣が筑後地方を代表する産業として発展していく礎となったことは、疑いを挟む余地の無い事実です。

文政10年（1827）頃には伝の弟子は千人を超え、その多くが更に技術を広め、久留米藩を全国有数の

絣の産地へと押し上げました。

井上伝については、同じく久留米城下の出身で、近隣に住まう稀代の発明家「からくり儀右衛門」こと田中久重との交流についての伝承も残っています。伝は、絵模様を織り出すための技術を久重に相談し、久重はその工夫を行なったというもので、彼の手記に「絵絣の発明」と記録があります。このときの工夫は、柄を彫り出した板で糸をきつく挟んで防染する「板締技法」であると推測されます。

このように、久留米絣はその誕生後、様々な人々の創意と努力により技術革新を続けてきました。現代につながる絵絣の技法を開発した大塚太蔵や、精緻な小絣の技法を生み出した牛島ノシなど、優れた職人の知恵を織りなしながら、久留米絣の技術は確立されて行つたのです。

2 広がる 久留米絣

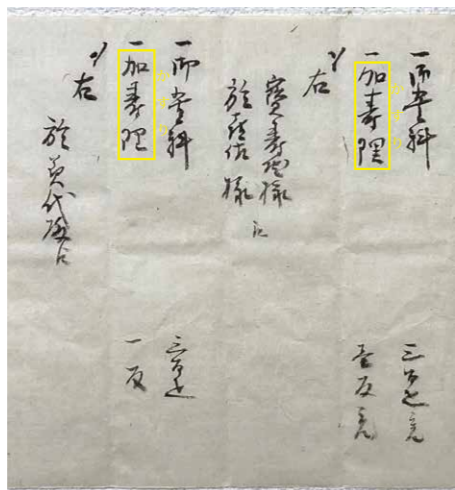
江戸時代の終わり頃、10代藩主有馬頼永の代に、藩財政の立て直しのため質素儉約を旨とする大倭令が出されます。これは、久留米藩最後の藩主である11代頼咸の代にも引き継がれました。領民も麻・綿織物以外の服装が禁じられる中で、藍染めの綿織物にもかかわらず、独特の美しさを持つ久留米絣は大人気となり、生産量も増加しました。藩は久留米絣を「国産品」に指定し、藩経済に組み込んでいきます。

井上伝によって創始された久留米絣は、改良や技術革新が進められ、意匠の幅も広がりました。また、藍染めの綿織物本来の堅牢さも相まって、需要が拡大し、久留米を中心とした筑後地方を代表する特産品に成長していきました。

3 信用失墜!!

回復への努力

明治時代になると、政府の殖産興業の振興などもあり、久留米絣は全国的にも名の知れた特産品となりました。



書状（部分）明治7年（1874）
※東京の有馬伯爵家（頼咸）を娘が訪ねた際の贈り物の内容 加壽理（かすり）1反とある

明治10年（1877）の西南戦争の際には、南九州の戦場へと向かう官軍の軍人たちが数多く久留米を訪れ、当時すでに評判の高かった久留米絣を土産物として競って買い求めました。ところが、この時、急激な

需要拡大の中、一部の生産者及び商人による粗製濫造品の販売が横行し、久留米絣は製品としての信用を大きく落としてしまっています。

この悪評と信用失墜の状況を憂いた国武喜次郎・本村庄平・松井儀平・岡茂平などの有志は、久留米絣の信用回復を志し、製品管理と責任の所在の明確化のための改善案を示しました。それは、

- ①これまでの、個人が染めから織りまでの一切を仕上げ、仲買人や商人に持ち込む「織替」を廃止し、織工は織立て賃のみを得る仕組みの確立

- ②品質維持のための原材料と製品規格の統一（原糸は国内の紡績糸を使用し、染料は地元産の藍と阿波藍を用いるとともに、製品の丈尺を規定）

というもので、この仕組みの確実な実施のため、染色業者は「緑藍組」を、

販売業者は「千年社」を組織し、織元・染元・販売元の責任を明らかにするために、3種類の責任商標を貼付することを規定しました。これにより、徐々に久留米絣の悪評は払拭され、信用回復が進むことになりました。

※阿波藍：徳島県産の藍



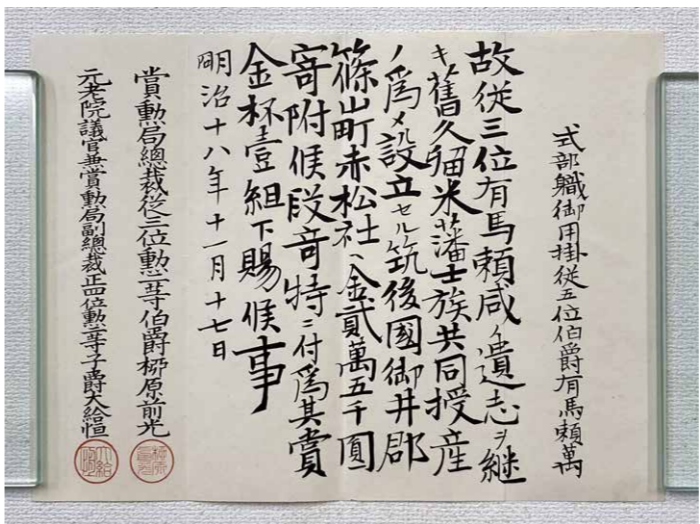
藍甕



4

品質の向上と
久留米緋の隆盛

明治16年（1883）には、旧藩主有馬家の寄附金と有志の義援金、政府の下賜金により、士族の授産施設として「赤松社」が設立され、品質の高い緋製品の生産が進み、久留米緋の年産額は約30万反を超えたとされます。



賞状（篠山神社蔵 有馬記念館寄託）
※有馬家の赤松社設立の功績に対し送られたもの

その後、明治19年（1886）には久留米緋同業組合が設立され、筑後一円の生産者はすべてこの組合に加入させ、厳しい品質管理を行ったため、緋業界の発展は軌道にのり、明治25年（1892）久留米緋は福岡県の重要物産となり、生産高も年間50万反を超えるようになります。明治32年（1899）には更なる品質の向上のため、久留米緋鑑定所を1市4郡に40数か所設置するという、全国にも例を見ない厳しい仕組みを作り上げました。こうして、検査の向上・不正の締め出しに取り組んだため、久留米緋の信用は確固たるものとなりました。

明治37年（1904）の日露戦争の開戦とともに織物業界は不況に見まわりましたが、久留米緋はその中でも生産数を伸ばし、戦後には年間生産高は百万反を超えるほどになります。大正末期から昭和初期にかけ

て久留米緋業界の繁栄は頂点に達し、年間生産高は2百万反を超え、緋業の従事者数は約5万人となりました。

5

迫る戦争の足音
久留米緋の危機

昭和恐慌の影響もあり、久留米緋の生産高は昭和3年（1928）をピークにやや下降線をたどります。戦争の足音が迫る政情不安の中、昭和13年（1938）に突然出された綿系統制令は、久留米緋業界に大きな衝撃を与えました。原糸の確保や製品の販売が厳しく統制され、生産者にとって死活問題であるこの事態に、当時久留米緋工業組合の理事長であった国武金太郎（国武喜次郎の長子）は、久留米緋の窮状を幾たびも陳情し、旧藩主有馬家14代当主である農林大臣有馬頼寧の口添えも得て、特免品として原糸を確保するこ

とに成功しました。

しかし、時局は太平洋戦争に向かい、多くの産業が軍需産業に切り替えられていく中で、昭和18年（1943）8月、ついに民需用の綿織物が生産禁止となり、久留米緋工業組合も解散するという、久留米緋にとって最大の危機が訪れます。

昭和3年（1928）当時、約21万7千反であった久留米緋の年間生産高は、昭和20年（1945）には137反まで落ち込み、緋製造を行う事業者と従業者の数も725戸4万8千560人から11戸2百人となりました。

6

伝統の技術を守れ！

久留米緋関係者は、この事態に際して、井上伝以来培われてきた伝統の技術が失われることを惜しみ、政府に対して技術保存を強力に請願し、

それが認められて、わずかながら綿糸の配給を受けることになりました。そこで、数多くの生産者の中から、特に高い技術を有する11名を選出し、昭和18年（1943）「久留米緋技術保存会」を発足させました。現在に続く久留米緋の伝統的技術の保存に対する取り組みは、ここに始まったのです。

7

伝統の技が文化財に

戦後いち早く復興に取り組んだ久留米緋は、昭和21年（1946）の12月には生産復活が認められました。明治以降機械化に取り組んできた久留米緋ですが、「手くびり」「純正天然藍染め」「投杼の手織り織機による手織り」という伝統的な技術の保存にも積極的に取り組み、この伝統の技は昭和32年（1957）に文化財保護法に基づく重要無形文化財に指定されました。



久留米緋反物

井上伝が生まれて230年以上が経過した現在でも、久留米緋の伝統の技は連綿と守り伝えられています。

※本文中使用した「書状」「賞状」以外の画像は、全て（公財）久留米緋技術保存会の提供による。